

誰かに教えたくなる 科学技術の話 103

未踏の土地を探険した人々



東京大学名誉教授 月尾 嘉男

現在の地球に生存している人類の最初の祖先は七〇〇万年前にアフリカ大陸に誕生し、そこから約一〇〇万年をかけて世界に分散していったというのが主要な学説であり、これをイギリスの考古学者B・フエイガンは「グレートジャーニー（偉大なる旅路）」と名付けた。しかし現在の人類の直系の祖先は約三〇万年前にアフリカで進化した「ホモ・サピエンス」とされ、これも世界に拡散していた。

このように世界へ拡散していく祖先の性質を継承し、人類は過去数百年間にも世界各地の最果ての土地を目指して冒険してきた。今回はヨーロッパを生地とする人々の視点からは未踏の土地とされてきた世界の各地へ進出していった冒険を紹介する。それらの土地に先住していた民族からすれば侵略であるが、世界が多様であることを多数の人々が認識したという効果は十分にあった。

ユーラシア大陸横断

ユーラシア大陸の中央を横断するアジアハイウェイの位置を約七五〇年前に徒歩で四年をかけて通行したのがヴェネチアの商人ニコロとマテオのボーロ兄弟と

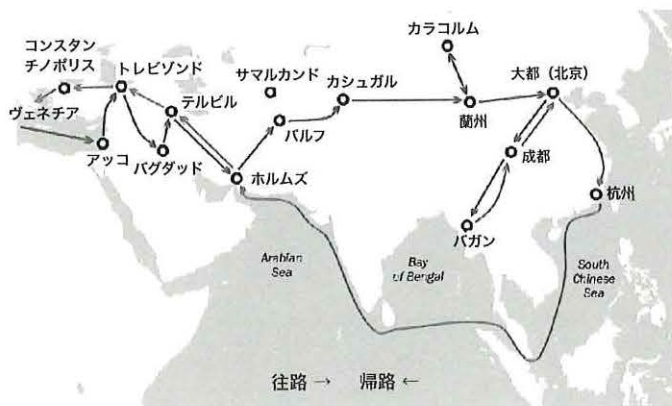


図1 マルコポーロの往路と帰路

ニコロの子供マルコ・ボーロである。一二〇六年にチンギス・ハンが建国したモンゴル帝国はヨーロッパ東部から東支那海まで東西二四〇〇キロの広大な領土を支配しており、その首都の上都を目指そうと挑戦したのが上記の三人である。
一二七一年にヴェネチアを出発した三人はエルサレムで教皇グレゴリウス一〇世からモンゴル帝国クビライ皇帝への親書を委託され、四年をかけて上都に到着

した。クビライに評価された一行は帝国の使節として東南アジア各地を訪問し、その報告がクビライに役立ったために重用され、何度も帰国を依頼したが承諾されず、結果として一七年間をモンゴルで生活することになった。

ようやく一二九一年になって帰国が許可され、海路で東南アジアを経由してペルシャ湾口のホルムズに到達し、そこから陸路でヴェネチアに帰還した(図1)。出発から二四年が経過した一二九五年のことである。しかし翌年、海戦に参加して捕虜となり、牢獄で一緒であった作家にアジアでの経験を口述したところ、これが『東方見聞録』となり、後世への貴重な記録となった。

ベーリング海峡横断

ユーラシア大陸と北米大陸は北緯六度の地点で幅員八六キロの海峡で分断されているが、十八世紀の時点では陸続きかどうか不明であった。そこでロシア帝国のピョートル大帝は確認のため、一七二五年に軍人のV・ベーリングの一隊を現地に派遣した。しかし、この探検では海峡の存在は確認されず、ベーリングたちは一七三〇年に首都サンクト・ペテル

ブルクに帰還した。

一七三三年に再度、探検が命令され、まずバイカル湖から流出するレナ川の途中にあるヤクーツクで準備をし、オホーツク海岸の港湾オホーツクから二隻の帆船(聖ペトロ号と聖パウロ号)で一七四〇年に出発するが、強風の影響で二隻は相互に見失い、ベーリングの指揮する聖ペトロ号は北米大陸からアリューシャン列島に連続する小島を経由してコマンドルスキー諸島に到達した(図2)。

当時の遠洋航海ではビタミンCの欠乏



図2 ベーリング海峡

による壊血病での死亡が多発しており、ベーリングも一七四一年十二月に死亡した。生存できた船員は小型の帆船を建造してユーラシア大陸に到着し、翌年、当初の乗員七十七名のうち四五名がサンクト・ペテルブルクに帰還した。一九九一年の現地調査によってベーリング以下六名の隊員の埋葬された遺体が発見され、モスクワに移送された。

北米大陸横断

西洋の人間で最初に北米大陸に到達したのはC・コロンブスと誤解されているが、それより五〇〇年前にスカンジナビア半島を拠点とするヴァイキングが到達しており、実際にカナダの大西洋岸に住んでいた遺跡も存在する。しかし、この広大な大陸の内部に西洋の人間が進出していったのは十八世紀以後で、それらの人々のうちでも有名な人物がM・ルイスとW・クラークである。

北米大陸の広大な地域を最初に領有した国家はフランスであったが、アメリカが一七七六年に独立してから二七年後の一八〇三年にミシシッピ川流域の二一〇万平方キロ(日本の国土面積の五・五倍)の土地をフランスから一五〇〇万ド



図3 ルイスとクラークの探検経路

ルで購入した。そこで第三代大統領ジェファソンは購入した広大な国土を調査するため、翌年から前述のアメリカ陸軍の二人の軍人を探査に派遣した。

二人を中心とする一隊は一八〇四年五月に現在のセントルイスから西方へ出発し、各地の先住民族の協力もあり、翌年十一月に太平洋岸に到着し大陸横断に成功した(図3)。一年半余の壮大な冒険旅行であった。その場所越冬し、一八〇六年三月に帰還を開始し、九月に出発

地点に無事到達した。この冒険旅行の成功以後、アメリカでは西部への関心が急速に増大し、西部発展の契機となった。

オーストラリア大陸横断

オーストラリアには数万年前からアボリジニと名付けられる先住民族が生活していたが、西欧の人間としては一六〇六年にオランダ東インド会社のW・ヤンスゾーンが上陸したのが最初である。それほど関心の対象にならなかったが、十八世紀後半になって囚人の留置場所の不足に直面したイギリスがオーストラリアを流刑場所とし、現在のシドニーの前面の入江シドニー・コープを上陸地点とした。しばらく内陸へ進出する活動はなかったが、一八六〇年にオーストラリア政府は大陸を南北方向に縦断する冒険に賞金を提供した結果、スコットランド出身のJ・M・スチュアートが一人の助手とともに一八六〇年三月に南岸のアデレードを出発したが成功しなかった。そこで再度、一八六一年十月に一〇人の部下とともに挑戦し、翌年七月に北岸のダーウィンに到着し、縦断に成功した。それに先行したのがアイルランド出身のR・O・パークとイギリス出身のW・



図4 パークとウィルズの探検経路

ウィルズで、総勢一九名で一八六〇年八月に南部のメルボルンから出発し、翌年二月に北部のカーペンタリア湾に到達し、ヨーロッパの人間としては最初にオーストラリア大陸縦断に成功した(図4)。しかし出発地点のメルボルンに帰還する途中のクーバーズ・クリークで二人は死亡し、成功を祝福できなかった。

北極横断

北極は南極と相違して大陸ではないので十九世紀から帆船で接近して氷上を徒歩で進行して極点に到達する探検が開始された(図5)。最初はアメリカのC・F・ホールで一八六〇年から七一年にかけて三回の探検、アメリカのR・ピアリは一八九一年から一九〇九年までに八回の探検をし、最後の探検で北極点に到達したと発表しているが、疑問とする意見もある。

さらなる挑戦をしたのはノルウェーの



図5 北極

F・ナンセンで、氷原を砕氷して進行するのではなく、氷塊に圧迫されて破壊されない頑丈な木造の帆船「フラム」を建造、五年分の食料を搭載して一八九三年七月に北極圏内に進入し、一八九五年三月に北緯八十四度四分に到達した位置からソリで荷物を牽引しながら徒歩で極点を目指した。しかし極点には到達できず、北緯八十六度一四分から帰還した。

このような冒険の時代は過去のものとなり、現在では北緯七十八度付近にあるノルウェーのスヴァールバル諸島から飛行機で北緯八十九度にある基地に到着して暖房の整備された施設に宿泊し、そこからヘリコプターで北極点に到達する。往復

三日の旅行であるが、一人あたり費用は約三〇〇万円である。わずか一三〇年前にナンセンが三年をかけて往復した時代は昔話になっている。

南極横断

陸地のない北極と相違して南極は世界で五位の陸地面積（二四〇〇万平方キロ）のある大陸である。一八〇〇年代までは北半球と南半球の陸地面積の均衡から南半球にも巨大な大陸があると推測され、**テラ・アウストラリス・インコグニタ**（未知の南方大陸）と名付けられていた。イギリスの探検家J・クックは国家の命令により一七七二年から三年にわたって探索したが発見できなかった。

ようやく一八二〇年に発見されるが、発見したのはロシア海軍軍人、イギリス海軍軍人、アメリカのアザラシ漁師の諸説があり確定していない。二十世紀になると極点への到達競争が発生、一九一一年十二月十四日にノルウェーの**R・アムンセン**が到達、翌年一月十七日にイギリスの**R・スコット**が到達した。しかしスコット一隊全員は帰路に遭難して死亡するという悲劇に見舞われた。

両者の経路は極点まで片道一七〇〇キ



図6 B・オウスランの南極横断 (1997)

ロ程度であるが、横断には三〇〇〇キロ程度の走破が必要であり簡単ではなかった。ようやく一九八九年にイヌゾリを使用した国際チームが成功したが、徒歩による横断は一九九七年にノルウェーの**B・オウスラン**が三〇〇〇キロを六四日で走破し（図6）、二〇一八年にはアメリカの**C・オーブレイディ**が五四日をかけて横断している。

地球の四六億年の歴史の二万分の一にもならない直近に登場した現生の人類は一瞬というほど短期に世界の隅々まで進出してきた唯一の生物である。その進出の有名な数例を今回は紹介したが、それらの活動は一方で自然環境の破壊、野生生物の消滅など回復不能な結果を地球環境にもたらしている場合もある。そのような視点からも今回紹介した活動を理解することは重要である。